

哲学の技法

第1章

合理的推測の技法

バートランド・ラッセル
(大塚 稔 訳)

The Art of Philosophizing
chapter I
The Art of Rational Conjecture
Bertrand Russell

Minoru OTSUKA

解 題

ラッセルのこの論文は、第二次世界大戦中に書かれ、1968年に公刊された。『哲学の技法』という表題からも知られるように、主に哲学的思考法に関する技術に焦点が当てられている。本文には、「合理的推測の技法」、「推論の技法」、「計算の技法」が収められている。今回は、その第1章に相当する部分を訳出した。

ラッセルの哲学は、いまだアメリカなどでは信奉者が多く、積極的な活動がなされているが、日本では、みずず書房の著作集が完成された後は、他の思想家同様、ラッセルの思想もまったく根づくことなく忘れ去られた感がある。最近、岩波文庫から数冊ラッセルの随筆類が訳されているが、大切と思われるラッセル流の明快な論理は流布版としては紹介されていない。

ラッセルは哲学を次のように定義づけている。「哲学は、科学のように厳密な知識ではないし、未開人の思考法のような根拠のない盲信でもない。哲学はこの両者の中間に位置している」と。このような思考法が修得されれば、例えば誤った信念が善なる目的の実現を阻むこともないと言う。中世では疫病が流行すれば、多くの人々が敬虔な信仰心から、神に救いの手を求めるために教会に祈りを捧げに行った。しかしこのことが結果として疫病を更に広めることになってしまった。換気が悪い教会に人々が密集したために、伝染病に理想的な環境を作ってしまったと言うのである。単なる迷信や偏見ではなく、正しい知識が求められる。

ラッセルの論議は、科学で複雑系が話題にされる近年から見れば、いくらか単純すぎる主張と言えなくもないが、論旨の明快さとその主張の適切さとは、現在でも十分に傾聴に値するものと思わ

れる。盲信や偏見を捨て、正しい思考を可能な限り求めること、それがラッセルの思考法である。

哲学の技法 バートランド・ラッセル

第1章 合理的推測の技法

まず哲学とは何かを手短かに定義づけておきたい。哲学は科学のように厳密な知識ではない。また未開人の思考法のような根拠のない盲信でもない。哲学はこの両者の中間にあって、「合理的推測の技法」と呼べるようなものである。この定義に従えば、哲学は、何が真実でありうるか、あるいはより真実に近いかを探ろうとする際に、どのように進めればよいかを教えてくれるものであって、実際に真理とは何であるかを哲学によって正確に知ることは不可能である。この合理的推測の技法は、異質な二つの方法にきわめて有効な働きをする。一つは、真理とは実際に何であることを発見する際にもっとも困難な点は、真理の可能性のある仮説を考えつくことである。この仮説を考えつければ、それを実際にテストしてみることが可能になる。しかしそのような仮説を考えつくには、おそらく天才的な才能が要求されるだろう。もう一つは、日常生活において、われわれはしばしば不確かな状況下で何らかの行動に出ることを強いられている。行動の遅れが危険や致命的な傷害を生むおそれがあるからである。このような場合に、もっとも起こりそうなことが何であるかを判断できる技法のようなものを持っていれば、非常に助かる。このような技法がきわめて広く一般的な仮説に関わる場合が、哲学なのである。従ってたとえば、「明日雨が降るだろうか」というような個別の問いは、哲学の問題には属さない。哲学が関わる問題はもっとも一般的な問いである。つまり、「世界は機械的法則に支配されているか」、「世界には宇宙的規模の目的のようなものはあるのか」、あるいは「世界にはこの両方の性格があるのか」というような問題である。哲学とは、このような一般的な問いに関して言えることがないかどうかを吟味することなのである。

あなた方が哲学者になろうと望まれるなら、まず次の点に気づく必要がある。つまり大方の人々はまったく合理的には正当化することのできないような信念の世界にどっぷりと浸かった生活をしているということ。だからこのような人々が抱く信念の世界には、絶えず衝突が付きまとう。両方が正しいはずがないからである。人々の意見は、一般に自分たちが快く感じさえすれば良い方向に流れるようになっている。真理など、一般の人々にはどうでもよい問題なのである。私の書物を読んでおられるような読者は何の偏見も持っておられないだろうが、あなた方が以下の点において大方の人々とは違っていることには同意されるであろう。あなた方がテネシー出身のバプテスト派であるなら、アメリカが世界のなかでもっとも偉大な国であること、テネシー州がどの州よりもすばらしいこと、そしてバプテスト派が神学的真理の唯一の宝庫であると信じている。かりにこのすべてが真理だと仮定してみよう。私は一体、他の州や国から来ている人に何を言うことができるだろうか。たとえば、フレンチカナディアンのカトリック教徒に、あなた方にとってはきわめて明白な真理を、どのようにして私は説得できるだろうか。あなた方とそのカトリック教徒にはまだお互いに認めあえるようなかなり多くの点があるだろうが、あなた方がイスラム教徒やヒンドゥ教徒、あるいは儒教徒と論議をしなければならない場合はどうだろうか。彼らは、あなた方が問題にするこ

となく受け入れてきた様々な事柄に疑問を投げかけるだろうし、彼らとの論議を有益なものにするためには、あなた方はお互いの仮説の底にある共通の基盤を見いだす必要が出てくる。

もっともあなた方でも、イスラム教徒とはまだいくつか同意できる点はあるだろう。人類の起源は猿か。そのような思想はくそくらえ！人類は宇宙の至高な栄光か。もちろん。このような問題は、あなた方が共に人間であるという共通性によって意見の一致をみるだろう。しかしある日、突然火星から何らかの知性体が降り立って、その知性体が人間が猿に勝っているように、人間に勝る存在だということに気づいたら、彼はおそらく、人間と猿との相違はわずかであって、両者に或る共通の祖先があるのは明白だと考えるにちがいない。そして彼は（哲学者でない限り）、あなた方が自信を持ってテネシー人であることの意義を主張したように、彼もまた自分のその主張を自信を持って火星人に伝えるはずである。これについてあなた方は一体何を言えるだろうか。

あなた方が哲学者になることを望んでおられるなら、あなたの受けた教育の場所や時間に限定されたような、またあなた方の両親や教師たちがあなた方に語った事柄だけに支えられているような信念は、できるだけ追い払うように努める必要がある。これを完全に実行できる者などいないし、また完全な哲学者もいないのだが、要はそれをどこまで達成しようと望んでいるかに掛かっている。「しかしなぜ私たちはそのようなことを望む必要があるのだろうか」と問う人がいるかもしれない。これにはいくつかの答え方ができる。第一は、不合理な考え方が戦争や他の暴力的闘争に非常に大きく関わっていること。社会が暴力的闘争もなく長く存立できる方法はただ一つ、社会正義を確立することである。この社会正義によって、自分たちが他の人よりも優れているとする考え方に屈することがいかに不正であるかを人は気づくのである。階級間に正義を実現すること、つまり階級差別をなくすことは、階級には、力や富の公平な分配以上に正当な権利があると信じている者がいるところでは困難である。国家間に正義を実現することは中立の国々によってのみ可能である。それぞれの国が自国を他の国より優れた国だと思っているからである。信条間に正義を実現することは、更にそれ以上に困難である。それぞれの信条が、その一つの信条によって、あらゆる主題のもっとも重要な真理が占有できると確信されているからである。哲学的なものの考え方が広く一般に広まれば、諸々の論議を満足のゆく公正なものにすることがよりたやすくなるだろう。

哲学的であることが望まれる第二の理由は、誤った信念は概して善なる目的を実現することを不可能にさせるという点にある。中世では、疫病が流行したとき、人々は教会に祈りを捧げに行った。彼らは自分たちの敬虔さによって神が動き、慰めの手を差し伸べてくれることを期待した。しかし実際は、人々が換気の悪い建物の中に密集したために、伝染病には理想的な環境を生み出す結果になってしまった。あなた方の手段をあなた方の目的に相応しいものにするためには、単なる迷信や偏見ではなく正しい知識を持たねばならない。

第三の理由は、真理は虚偽に勝るという点である。自分の都合のいいように嘘をつき通すことには何かしら後ろめたいところがある。だまされた主人がいつも笑いの種になる。同じ様なことは、騙されたりかつがれたりして得られているような幸せにも言える。それにも悲哀に満ちた笑いを抑えきれない面がある。

哲学者になりたいのなら、知性と感情との両面を訓練しなければならない。この二種類の訓練は、極めて密接に関連しあっているが、論議をする場合にはある程度分けて話を進める必要がある。まず知性の訓練から始めることにしよう。

知性の訓練には、肯定的な側面と否定的な側面とがある。つまり何を信じるべきであって、何を信じなくてよいかを学ぶ必要がある。はじめにその肯定的な側面から論じてみよう。

要するに、あらゆることは多少とも疑わしいと言っても、いくつかの問題については、実生活上のすべての目的を遂行する上で、何らその種の懐疑を無視しても差し支えない場合が確かに存在する点である。こう言えば、哲学者志願者は、いったいどのような知識が少なくとも疑えるのか、またなぜ疑えるのかと問うはずである。この問題を探求し始めると、おそらく彼は、まず合理的に考えておおよそ確実な知識とは少なくとも異議の差し挟めないものだろうと仮定し、ただちに、このような知識が激情にかられた知識でも、あるいは知識まがいのものでもないことに気づくであろう。九九表についてはすべての人が同意するだろうが、九九表に聖なる真理が含まれているという主張にはついて行くとはできないはずだ。誰かがたとえ九九表の真理を否定しても、磔刑に処せられたり、内乱罪にあたるスパイとして投獄されたりすることはない。分別のある人なら、算術の異端児の手に落ち、九九表に対する信頼を考え直せと迫られても、おそらく言う通りにするだろう。彼には、自分の考えを改めたところで九九表自体には何らの害も与えないことが分かっているからである。これが信念の特徴であって、このような信念には、何ら合理的なところはない。

誰であれ哲学者になろうとする者は、数学に関しては相当程度の知識をものにしていての方がよいだろう。数学を修得する課程で、彼はおそらくどのような真理であればもっぱら思考力だけで、つまり観察の手を借りずに、発見されるかを知ることができるようになるであろう。そして同時に厳密な思考にも慣れるし、そのような思考に慣れれば、合理的思考になれた者ですらも陥りがちな誤りがどのようなものであるかを知ることができよう。この点を学習するには、数学を歴史的に研究するのがよい。例えば、アインシュタイン以前には、引力が瞬時に伝わることは数学的に証明済みのことだと誰もが考えていたが、アインシュタインの理論では光の速度で伝わるはずだと主張された。数学者たちに、自分たちが何世紀にもわたって満足な理論だと考えていた論議に誤りがあることを気づかせるには、これで十分であった。そして現在では、ナチス黨員でもない限り、どの数学者も、引力の伝達速度がアインシュタインの言う通りであったと考えている。この問題は非常に高度な難問ではあったが、この例から、数学全般に対する懐疑に陥るのは誤りであろう。もちろん問題が、数学の問題であるよりも、複雑かつ我々の感性により接近した関係にあるような場合には、推論に誤りが入り込むことの可能性が多くなると考えるのは当然である。とりわけ社会的な問題や宗教的な問題ではそれが顕著である。

論理学は哲学者には有用だが、それは現代の論理学であって、スコラ哲学者たちがアリストテレスから取り出したような息の詰まる中世の論理学ではない。論理学が有用なのは、主に推論する際にどこに注意を払うべきかを教えてくれる点にある。例えば、一つの階級や国家が他の階級や国家によって抑圧されており、あなたは当然このような抑圧はやめるべきだと考えているような場合、彼らは、あなたに抑圧されている自分たちの階級や国家の方がより優れた道徳的資質を持っていると見なしてほしいと言うかも知れない。しかしあなたには、いずれの階級や国家にも個人的な好みがないので、そのようなことを聞いても驚くほかないであろう。ここには、両者が話題にできるような論理はない。もっとも論理的な訓練のない者には、一つの論理しかないように思えるが。あなたが論理学の専門家になればなるほど、あなたが妥当だと認める推論は少なくなるだろうし、また同時に二つの意見を主張することに矛盾を感じるものが少なくなるであろう。これは、実生活には

重要なことである。それによって必要な妥協が計られるようになるし、極めて閉鎖的な考えを持ったいくつかの集団の意見を受け入れなくて済むであろう。カトリシズムや共産主義、あるいはナチズムのような閉鎖的な考えは、徐々に排斥されつつあるし、実際、確かにその一部は誤ったものであるのは明らかである。論理的分析の訓練を積めば、そのような安易な精神の装飾にますます満足感を抱かなくなるだろう。

論理学と数学は、あるがままで有用なものだが、それは哲学者にただ知的な訓練をするものでしかない。それらの学問によって、世界をどのように研究すればよいのかが理解できるが、世界の実際の内容がそれによって知られることはない。それは自然という書物のアルファベットであって、書物そのものではない。

とりわけ必要とされる知識は、もし哲学者になることを望まれるなら、科学の知識—それも細部にわたる知識ではなく、その一般的な結果、つまり科学の歴史とりわけ、その方法—である。現在の世界と17世紀以前の世界との相違は、科学によって生み出されている。魔法や魔術、妖術への盲信を破壊したのは科学である。現代の教養人に、古い信条や迷信を信じさせなくしたのも科学である。また地球が宇宙の中心だという考えや人間が創造の至高な目的だとする考え方を、笑いものにしたのも科学である。宗教に端を発する心身の古い二元論や精神と物質との二元論の過ちを示そうとしているのも科学だし、我々自身を外部から、興味ある機械として、ある程度考えさせるようにし始めているのも科学である。確信犯的な誤りを仮定の真理に置き換える方法を示したのも科学である。科学的な精神、科学的な方法、科学的世界の枠組みは、古書からさまざまに出てきたようなまさに錆び付いた哲学者ではなく、まさに現代の哲学者になろうとする者がまず手始めに修得せねばならないものである。確かにプラトンは偉大な天才であったし、アリストテレスは百科全書的な知識の持ち主であった。しかし彼らの伝統を受け継いだ弟子達には、プラトンもアリストテレスももっぱら誤りだけを吹き込めるだけである。ガリレオやニュートンとの一時間のほうが、プラトンやアリストテレスとの一年よりも有益であろう。しかし大学に行けば、このような考え方があなたの師事する教授の考え方だというわけにはいかないかもしれない。

科学は、今述べたように、哲学者には大切なものである。それは、科学のもたらした考察の結果においても、またその方法においても重要である。それらの結果と方法について、順次考えることにしよう。

まず結果について言えば、哲学者にとって重要な結果は宇宙の歴史、その過去と未来の歴史である。初期の宇宙や最後の宇宙については推測の域を出ないが、その中間にはそれほど疑わなくいいような長い連続した時間がある。宇宙のごく生成期には、おそらく至るところに星雲状の、極めて薄い霧のようなものがあつたであろう。また星雲状の雲の一部にはそれほど薄くない部分があつて、これらが徐々に星を形成していった。我々の星、太陽は他の星がその近くを通つたためか、あるいは他の理由で、多くの惑星を生じるに至つた。それらの惑星も当初は太陽と同じように灼熱の状態であつたが、小さくなるに従つて冷えていった。その一つが、適当な温度に達した時、化学的に複雑なある種の構造が生み出され、それらの化学的構造がそれ自身の組成と構造を周囲の適した物質に与える特性を持てるようになった。この特性が生命と呼ばれるものである。この生きた構造がやがて複雑さを増し、動物や植物の世界を形成することになった。そのもっとも複雑なものが人間である。生命の存在は、化学的にも気象的にも、多くの条件に左右される。遙か昔には、気象は

生命体にとって極めて熱すぎる環境にあっただろう。おそらくこの気象も、やがては住めないほどに冷えきることであろう。しかし天文学者の中には、例えばジェイムズ・ジーン卿などは、地球が冷えすぎる以前に太陽が爆発し、それによって地球も他のすべての惑星もガス状のものになるだろうと述べておられる。紆余曲折はあるにせよ、地球上の生命体がやがて消滅することはかなりはつきりしている。

この宇宙は、時間と空間との両面においてかなり規模の大きなものである。太陽は、地球からおおよそ9千3百万マイルの距離にあり、太陽の光が我々の眼に届くまでに8分かかる。もっとも近くの星でもその距離は膨大なもので、その光が達するまでには数年かかる。我々が自分の眼で見ることのできる星はすべて、銀河内のものであって、銀河はまた限りなく存在する星団の一つにすぎない。この星団に加えて、およそ数百万個の星雲がある。それらは、想像を絶するほどの距離にあって、その光が我々の眼に達するのに、秒速18万マイルの速度で、何十万年もかかる。時間のスケールで考えれば、地球が存在して何百万年にもなるが（訳注：最近の研究では、地球は誕生して46億年になると言われている）その誕生は、太陽とほぼ同じ頃である。ジェイムズ・ジーン卿が太陽の爆発を云々されると、はじめはこの破局がいかにも差し迫ったことのように語られているように思えるのだが、結局は慰めるように、百万年の間はそのようなことはないと言ってくれる。宇宙は、着実にエネルギーが一様に拡散する状態に向かいつつある。そうなれば現在あらゆる目的に利用されているエネルギーが役立たなくなる。そのときには、おそらくそれよりはるか以前にだろうが、生命体は至るところで死滅し、奇跡だけがそれを救い得るような状況になるであろう。たとえどれほど宗教心を持った科学者でも、カトリック教徒でない限り、現在判明したことからすれば、これらのことがおそらくそのまま生じるという結論に異議を差し挟むことはできないだろう。

この宇宙像を、聖書や教父たちの宇宙像と比較してみよう。この教父たちの宇宙像は、科学によって我々がそれを疑問視する以前まではキリスト教国家において一般に広く受け入れられていたものである。聖書や教父たちによれば、この宇宙は神の命令によって六日間で創造された。その創造の日は、創世記の記述から、およそ紀元前四千四年と見積もられている。地球は宇宙の中心であり、アダムとイヴの創造が神の最後の御業であった。神は、彼らにある一本の木に生えている実は食べるなど命ぜられたが、彼らはそれを無視して食べた。神は、彼らがそうするのを先刻承知の上で、怒られた。あまりの怒りに、神は無限の懲罰を与えられた。そうしてアダムとイヴ、およびその祖先たちのすべては永遠の業火に焼かれる定めとなった。しかし神の子は、一部の人類のためにその罰を自ら背負い、十字架刑に甘んぜられ、三日間地獄で過ごされた。神の子が受けられた苦しみによって、正当な神学的思想を語る人々、およびある一定の儀式を経た人々は、地獄ではなく天国に行けるようになった。眼に見えるこの世界は、キリストの第二の再来—その時期は定かではないが—によって消滅する。最初の弟子たちは、それがほど遠からぬ時期に実現されると信じた。少なくとも紀元後千年のうちのことだと期待された。プロテスタント派の中には、ここ数年のうちにそれが実現されると信じる者もいる。その後には、ただ天国か地獄—およびカトリックではこれにしばらく煉獄の期間を入れるべきだろうが—かしかない。

科学の宇宙像と聖書の宇宙像との相違を簡略に記してみよう。まずスケールの相違が挙げられる。キリスト教の宇宙は、小さくかつその時間的持続（天国と地獄での時間を除けば）も短い。一方、科学の宇宙像では、時間か空間かのいずれかに始まりや終わりがあるというのは知られていないし、

両者に想像を絶するほどの幅と広がりがあるのは明らかである。キリスト教の宇宙では、すべてに目指すべき目的があり、すべてがその居場所を持っていた。その宇宙は、良き家政婦の台所のように、こざれいに整えられた宇宙であった。もう一つの相違は、キリスト教の宇宙像では、地球が中心に据えられていたが、科学の宇宙像には中心がない。またキリスト教の宇宙像では地球が固定され、その回りを天球が回るとされていたが、科学の宇宙像ではすべてのものが動くと言われる。キリスト教の宇宙は人間のために造られたが、科学の宇宙では、もしそれがどのような目的にも仕え得るように造られているとすれば、我々の想像できないようなもののために造られていると見なされる。なるほどアリストテレスから十七世紀の二千年間にわたって科学まがいの思想を支配してきた目的という概念はすべて、現在では科学的説明から消えてなくなってしまった。現在見られるような自然法則がなぜ自然法則でなければならないかという問いは、科学が問うことを止めた問いである。それに答えがあるという理由が全く見いだされないからである。罪や罰というような倫理的概念がキリスト教の体系には核として存在するが、科学的な体系にはそのようなものが入る余地はない。キリスト教の宇宙像は、無教養な人間がそうであってほしいと期待した宇宙像であるが、科学の宇宙像は、我々の偏見や希望、愛や憎しみを冷静に放置する。

これらの相違以上に重要な相違は、両者が差し示す根拠の相違である。キリスト教の体系では、聖書がその根拠とされるが、科学的な世界では観察と帰納とが根拠とされる。科学は、聖書の説明を受け入れるにはどのような根拠にたてばよいかを問う。『五書』の著者は、創造に立ち会ったのか。明らかにそうではないだろう。我々は、神がその五書の著者たちに真理を開示したと信じることができるだろうか。開示したと考えるには余りにも問題が多い。聖書が唯一の聖なる書物であるわけではない。他の諸々の宗教にはまた異なった宇宙起源論がある。公平に物事を捉えようとする人間は、いったいどれを信じればよいのだろうか。聖書は時に矛盾したことを述べている。アダムとイブの創造については明らかに異なった二つの説明が与えられているし、ある場所では、箱船には二匹の羊がいると述べてあるのに、他の箇所では七匹と言われたりしている。もっと例を挙げれば、北アメリカに住んでいたイエズス会士のアコスタ氏は、すべてのものがアラフト山に由来したにちがいないのに、北アメリカには動物しかいないことに困惑した。とりわけナマケモノについてはその困惑はひどかった。ナマケモノは、動きのきわめて緩慢な動物であって、洪水の後に動き出してきたにしても、北アメリカにまで達することはほとんどありえなかったはずだと。もちろん船員たちも、旧世界から実に様々な奇妙な獣を持ち帰ってきたとは思いますが、その崇拜するにふさわしい神父にはありえないことのように思われた。とりわけ耐えられないほどの臭いを発する蝗が神の創造したものとはどうい思えなかった。また化石に関する難題もあった。創世記が真実なら、世界の創造以上に古いとしか思えない化石が見つかったからである。創世記への素朴な信仰は、徐々にではあるが大方は捨て去られたし、その道は科学的説明を受け入れるべく掃き清められた。

はるか以前の時や場所について言及しなければならない場合には、科学はもっぱらためらいがちに述べる。つまり科学は、現存する証拠から見てもっとも蓋然性のある事柄として述べる。あれこれと新しい証拠が見出されて新たな結論を出す必要に迫られる日が来るかもしれないが、科学の宇宙像が全く根本から変化してしまうことはおそくないだろう。神学は、科学がその権威を弱める以前に、自らの主張をかなり特異な形で述べた。曰く、真理は永遠であり、不変であり、疑い得ないものだ。これを疑問視する者は、ジョルダノー・ブルーノのように、火あぶりの刑に処せ

られ、まちがいなくその後は時の終わりまで業火に焼かれるに相応しいこととされた。もはや現在の神学者でこのようなことを述べる者はいないだろうが、それは、不可謬の教義ですらも科学の猛攻撃に立ち向かうには、いくらかでも教義を密かに変える必要に迫られてのことである。

哲学者になろうとする者は誰でも、科学の歴史に注意を払う必要がある。とりわけ神学との闘争史には注意が必要だろう。純粋数学を別にすれば、あらゆる科学は主張する権利を戦い取らねばならない状況にあった。ガリレオの天文学も、ビュフォンの地質学も非難された。科学的治療は、教会が死体解剖に反対したために長い間ほとんど実施することができなかった。ダーウィンは遅く生まれてきたことが幸いして処罰を受けずに済んだが、カトリック教会やテネシーの州議会はなお進化論をおぞましきものと見なしている。それぞれの一步が困難の末に勝ち取られてきたのは事実だが、それぞれの分野での新たな一步が、まるで過去の打撃から何も学びえなかったかのように、なおも反対されているのが現状である。

今日その反撃対象としてもっとも話題にされるのが、心理学である。特に心理学が「罪」の理論と抵触するように思われる場合に、顕著である。どのような人間社会にも、社会の利害に著しく反するような行動を取る者はいらる。それでも社会生活が維持されねばならないとすれば、そのような反社会的な行動を阻止する方策を見いだす必要があるだろう。「罪」の概念は、このような者に効果を及ぼすべく案出された教会の方策であった。警察がたとえそれに失敗しても、罪人には取り逃がされたことが喜ばないように必ず神は罰すると言うのである。確かにこのようなこともある一定の事件には有効であった。しかし現在では、反社会的な行動の多くが心理的原因に大きく影響されていることは周知の通りである。これは、その原因が心理的に治療されないかぎり決して解決されることはないだろう。過去において無差別に「罪」と名づけられてきたものの大半は、現在では罰することよりも医学的治療の方が相応しいような病気であることが分かってきている。「罪」はどのようなものであれ、罰せられるよりもむしろ医学的治療がなされるべきだと考える人々は、公認の教義に従い告発されることになる。この例は、心理学には歴史がなく学問として未熟な点があることを認めながらも頑張ろうとする科学に対する昔ながらの反発である。倫理学でも同様に、新たな考え方を阻止しようとする動きが続いている。最近妻を亡くしたある男性が妻の妹と結婚しても、誰も害されたわけではないのに、教会はこのようなふしだらな行為に衝撃を受けてうろたえる。「罪」は、他人を害することではなく、聖書や教会が不道德なこととして厳に定めている事柄を犯すことにあると言うのである。

ようやく科学的方法がどのようなものなのかを言うべき時が来たようだ。科学とは、不変的な法則の発見に関わるものであって、個別な事実に対する関心は、もっぱら法則に反するか否かを決定する証拠としての関心である。地理学や歴史学は自分の利益を計るために個別な事実に関心を示すが、それらの学問も普遍的法則が発見できない限り、科学とは言えない。我々が法則のない世界に住んでいるという事実に注意を向けなければならない。パンが一日を潤しても、翌日は石であるかもしれない。ナイアガラの滝が下に流れずに上に流れるかもしれない。火にかけた茶瓶が時には凍るかもしれない。考えただけでもぞっとするが、論理的にはありえないことではない。我々の世界がそのような世界でないのは幸いである。我々は思考しはじめる以前に、多くの規則性―昼と夜、夏と冬、種蒔きの季節と収穫の季節等々―に馴染んできた。激しい雷雨のような不規則に見える事柄については、当初から二つの可能性が考えられた。一つは、規則性はあるのだけれど複雑すぎて

理解できないとする見方、もう一つは、このような現象は気まぐれな神の仕業だとする見方である。この後者の見方は、未開人に広くみられる見方であったが、ベンジャミン・フランクリンの時代までボストンの牧師達にも信じられていた見方でもあった。このような畏敬すべき牧師達は、避雷針は不敬なことであり、神の怒りを受けて、地震が多発したのだと主張したが、世間の人々は、彼らに逆らうことに決めたようだ。

すべての自然現象が普遍的な法則によって生じているとする考え方もっともこれらの法則も、微細な量子転移の場合には統計的ではないのだが、ようやく受け入れられてきている。普遍的な法則の発見は時に困難を極める。それは太陽系の研究を例に挙げるとたやすく理解できる。ケプラーは、火星が楕円軌道を描いて太陽の周囲を回っていることを証明し、他の惑星も同じような軌道を取っているだろうという根拠—決定的なものではないが—も提示した。そうしてニュートンが引力の法則を発見し、それは二百年の間何ら修正されずに認められてきた。しかしアインシュタインは些細な見解の相違から、理論としては画期的なものだが、実際には取るにたりない事柄をもとに、ニュートンの理論に一つの変革をもたらした。ニュートンの理論は、わずかの事例において、かつきわめて厳密な計測のもとでのみ予測の誤りが指摘されるにすぎないのだが、それでも現在では、厳密には正しくないことが認められている。このような科学上の経緯は、科学的方法が何であるかを示す一つのサンプル、一つのモデルとして考えることができるであろう。仮説と観察は連動したものであって、新たな仮説が新たな観察を要求するような関係にある。その仮説が受け入れられるには、以前のどの仮説よりも事実にあうものでなければならない。しかし新たな仮説が新たな観察を要求するというのは、常に可能性に留まる事柄であって、ほぼ確実にそうなるわけではない。新しい仮説が古い仮説の誤りを決定的に示さず、正確とは言えないという程度の指摘に終わる場合もある。賢明な科学者はこれまでもそのような指摘をしてきたというのが、事の真相である。

哲学者が知識を探求する場合、一般に認められるいる科学法則については、ほぼ近似的に正確なものだと考えるようにすればよいだろう。これ以上に考えるのは軽率である。

これまで私は、哲学者になるための予備訓練としてその積極的な方面を考えてきた。以下ではその消極的な側面について考えておきたい。私は十五才前後の少年の頃に、私のすべての信念を吟味してみようと思ひ立ち、それらの信念が伝統や私自身の偏見に基づいたものでしかないことが分かれば、放棄しようと思ひ決した。そのようなきわめて気むずかしい生活を続けることで、私は一日に一つずつ苦しい可能性を直視しようと思ひ考えた。まず手始めに私は、イギリス人はワーテルローの戦いで負けた方が良かったのではないかと考えてみた。長い間この仮定を考えた末に、ナポレオン側から見た論議を一つ考えついた。もしナポレオンが勝っていれば、イギリスは十進法になっていただろうにと。私はすぐにもっと大切な問題—例えば、キリスト教の教義—に考えを進めた。この問題については、私の信仰を傷つけずに済めばと強く望みながらも、公平を旨に同じように吟味にかけてみた。このような思考プロセスは、哲学者になろうとする人々には有効だろうと思ひ。もしあなたが自らの偏見に対して論を構えようとする必要がなくて、それらの偏見を信じている人々に対して論を構えさえすればよい場合には、先の思考プロセスは更にたやすく実現できるにちがいない。もしこの国のすべての学校にイスラム教徒と仏教徒とが一定の割合で含まれているなら、これほど素晴らしいことはない。彼らは大半の生徒がキリスト教徒のなかにあっても、おそらく自分達の宗教を弁護しようとするだろうから。これによって、双方が抱く不合理な信念の呪縛が少しでも解け

る可能性が開けるだろう。

否定的訓練においても一つの大切な要素は、人間の不合理な信念の歴史を見ることである。アリストテレスは、結婚していたにも関わらず、女性は男性より歯の数が少ないと主張した。近代の初期までは、すべての人々が火中に住む火トカゲを信じていた。シェイクスピアは、ヒキガエルの頭には宝石が入っているという迷信を繰り返し述べている。これらは、人々の感情を駆り立てる問題ではなかった。この程度の問題で、人間の偏見の強さを示せるとするのは誤りだったのか。十六世紀にはすべての人間が魔術を信じていたが、これについては粗末な被造物ですらも非難したであろう。歴史の中には、現代人には到底受け入れられないような検証済みの奇跡が散見される。もちろん私はここで、暗にカトリックの聖者が行った数々の奇跡のことをほめかしているのではなく、同じように熱狂的なアイレオス派やメストリオス派、キリストの単性論を主張するそれぞれの異端や更にひどい異端によって行われた奇跡のことを言っているのである。歴史的証拠に基づけば、その証拠がかなり不自然な力によるものでない限り、極端に素晴らしいことなど受け入れることはできない。いつの時代にも人間は、悲しむべきことに、後の時代から見れば誤りにすぎないことを信じてきたが、これは現代でも同じである。

哲学者の育成には、感情と知性との両方を訓練することが大切である。人間が環境の産物であることを見抜けることは重要なことである。かりにある人種が他の人種より価値があると言う場合に、その価値のある人種をいかに広めるかの方策を考えるのは、科学である。正統教義では、これが説教によってなされているが、経験がこの理論を支持することはほとんどない。どのような主義・理想も人間を誤った行動に進ませる可能性がある。誤った教育、誤ったダイエット、経済上の心配等々。道を外れた振る舞いをする者に腹を立てるのは、車が動かないことに腹を立てるのと同じように、時間の無駄である。両者の違いは、車なら何とかガレージにまでもって行けるが、ヒットラーを精神科医のところへには連れて行けないことである。しかしどこにでも存在する若きヒットラー予備軍に対しては、何とかすることが可能である。そのような若者は善良な市民にもなれる可能性があるからである。もし彼らを「罪人」と考えるなら、あなたも彼らと何ら変わらない程度の知恵の持ち主だということになるだろう。

自分の考えと異なる意見に腹を立てず、なぜそのような考え方ができるのかを理解することに意を尽くすことが大切である。理解した後でなおも彼らの考え方が間違っているように思える場合には、単に脅威を抱き続けた場合よりも遙かに効果的にその意見と戦うことができるであろう。

哲学者はいかなる感情も持つてはいけないと言っているわけではない。何の感情も持つていない人間は、もし仮にいても、実際には何もしないだろうし、何かを達成することもないだろう。どのような人も、あまり一般的ではないある種の感情を持たない限り、良い哲学者にはなれないだろう。良い哲学者は、可能な限り世界を理解しようとする強い欲求を持たなければならない。それを理解するためには、正しい洞見を不可能にさせるような視野の狭い見方を進んで克服するようにしなければならない。あれこれのグループの一員としてではなく、まさに人間として考え、感じるようにしなければならない。もしそれができるなら、人間としての諸々の制約から生じる観念からも自由になれるだろう。もし火星人やシリウス人として世界を眺めることができるなら、つまり一日しか生きれないような生物として世界を見ることができただけでなく、同時に百万年も生きられる生物として世界を見ることができるとしたら、おそらく更により良い哲学者になれるだろう。しかし

このようなことを哲学者に望むことは不可能である。哲学者もその身体は人間の感覚器官に縛られている。この人間の主観性はどの程度超克することができるのだろうか。この世界の現象ではなく本質が何であるかを些かでも知ることができるのだろうか。哲学者の知りたいことはまさにこの問題であって、これを知るために公平無私な観点を修得すべく長い年月を費やしているのである。

これまでは哲学者になるための初歩的な訓練について述べてきた。本当の意味での哲学的な問題を扱うのはこれからである。論理学と科学との訓練を終えた後、あなたを哲学者に駆り立てた問題にこれまでの訓練を適用するには、一体何をすべきだろうか。

伝統的なタイプの教授に聞くと、おそらくプラトンやアリストテレス、カントやヘーゲルを読みなさいと薦めるだろう。そしてそれほど優れたものではないがと言いつつ、デカルト、スピノザ、ライプニッツ、もっとも用心すべき哲学者として、ロック、バークレー、ヒュームの名が挙げられるだろう。この指示に従えば、どのような大学に行っても、「哲学」についてはこれで間違いなく合格点がとれる。そしてかなりの努力を払って、偉大な哲学者たちの様々な考え方を修得するにちがいない。しかし、「偉大な」哲学者たちの書物を読んでいる間は、あなたは自分の知性を眠らせておかねばならないし、そうすると、あなた自身が哲学的な問題をどのように考えればよいかを発見したという経験は持てないだろう。偉大な哲学者たちの言ったことなど大半が屑であって、前科学的な精神風土に属するものでしかないことは、あなたには明白なはずである。彼らの言うことは一部は誤っているし、一部は巧みな推測でしかない。あなたの抱えている問題を解きたいのであれば、あなた自身が解かなければならないのは、言うまでもない。

どのような問題の中からでも哲学に至ることは可能性である。例えば、ちょっと前に述べた問題、すなわち世界の現象ではなく、本質についていくらかでも知ることができるかという問題を考えてみよう。

まずこのような問題がどうして起こったかを考えよう。われわれは、内省する場合を除き、一般に事物を眼で見、それがどうであるかを想像する。しかし動物たちはわれわれとは異なった見方をする。彼らは絵を理解することができない。もしかりに動物たちにでも理解できるような絵の作り方が分かるなら、われわれには理解できなくても動物たちには理解できるような絵を作れる可能性はある。トンボは非常に珍しい眼をしているが、彼らにはわれわれとはきわめて異なった世界が見えているはずだ。われわれが見たり聞いたりするものは一別の角度から捉えると一常に現在起こっているように見えたり、聞こえたりするものである。しかし周知のように光や音は伝わるのに時間がかかる。物理的現象である雷鳴は光と同時に生じているが、われわれには音が後に聞こえる。夕日が沈む景色を見る場合も、太陽は「実際には」八分前に沈んでしまっている。しばしば起こるように、新しい星が誕生しているように見える場合も、現在眼にしているその出来事は千年前に起こったものであるかもしれない。また物理学者が同意しているように、われわれの経験する色は単にわれわれの知覚の中にあるものでしかない。われわれが知覚する色に相当するものを外界に求めるとすれば、横波ということになるが、それは色とは全く異質なものである。物理学者の世界と感覚の世界とは、単にある一定の共通点しかない。感覚の世界一かりにそういうものがわれわれの外部にあるとして一は、おおよそ観念や信念の反映した幻想である。

この種の困難を常識と最小限にしか乖離しないように捉えようと望むなら、どのように言えばよいのだろうか。結局は、物理学者がしているように、われわれすべてがある共通の世界に生きてい

るということを注意して観察するしかないだろう。トンボは奇妙な眼をしているが、蜂蜜の壺に集まってくる。ある意味では、多くの人々も、その感じ取り方は違うにせよ、同じ出来事を感じ取ることはできる。両者の相違は主観的なものであるにちがいない。感じ取られたすべての知覚に共通するものが、我々の感覚器官とは独立に、その出来事自体に備わっている可能性がある。これが、粗雑に言ってよければ、物理学者の前提であるが、私には理に叶った仮定のように思える。もちろんこの仮定を確実なものを見出すことはできない。既知のすべての事実が説明できるような他の仮説が存在するからである。しかしこの仮定には反証できないという長所があるし、その仮定によって誤りが実証されるような帰結に至ることもない。反駁できない仮定が一般にそうであるように、その仮定も我々の素朴な信念にかなり合う所まできている。

この問題を完全に処理しようと思うなら、ここで立ち止まってはならない。あなたが真だと思わずすべての事実と両立するようなあらゆる仮定を理論化する方法を見出すようにする必要がある。仮定はすべてその帰結が実証可能なものでなければならない。従って、実際の目的にはそのいずれかの仮定を採用しようと実質的には何ら差異はない。これを可能な限り達成できれば、あなたはできることのすべてをしたことになる。真だと断言できる一つの理論に達せなくても、そのことによつてあなたはそのような理論が不可能であることを示したことになるし、今後は真と見えるあらゆる理論を改めて探求すればよいからである。哲学者にこれ以上の要求をすることはできない。

また別の哲学上の問題を次に取り上げてみよう。それは、霊魂と身体、あるいはもっと一般的に言えば、精神と物質の問題である。常識ではこの種の二元論は当然のこのように思われる。我々はすべて、身体があり精神があることを明瞭なことと考えている。しかしながら哲学者は一般的にこの種の二元論を好まない。だから、身体は精神によって生み出された幻想であるとする「観念論者」もいるし、精神は身体の振る舞いの一つの現れにすぎないと考える「唯物論者」もいる。精神と身体との区別は常に存在してきたわけではなく、もともとは宗教的興味から生み出されたものであった。霊魂は不滅だが身体はそうではないとはじめに論じたのは、プラトンである。この理論は、古代末期にまず新プラトン主義者たちによって、その後クリスチャンたちによって取り上げられ発展した。それが十分に著作に反映されたのがアウグスティヌスにおいてである。このように純粹に哲学的かつ神学的な起源を持った理論がふつう一般の男性や女性の思想の中に浸透し、ほとんど自明のことと思われるようになったのは注目すべきことである。しかし将来哲学者になろうとする者は、更に有効な方法を求めてこの区別のすべてをあらためて吟味し直す必要がある。そうすれば、この問題が一般に思われているほど明白なものでないことも分かってくるだろう。

一見すると、思考は明らかに心の中の出来事のように思えるが、腕の運動は私の身体の出来事である。しかし「考える」とは一体どういうことなのだろうか。また「私の腕の動き」ということによつてどのような意味があるのだろうか。いずれも明白なことがらだとは言えない。

まず思考についてはどうだろうか。私は、快感や苦痛を経験するし、ものを見たり、聞いたり触れたりする。思い出しものすれば、欲望を感じたり決定をしたりもする。これらのことはすべて伝統的には「心的」出来事に分類されてきたし、おおむね「考える」ことだと呼ばれてきた。確かにこのような出来事は起こっているし、思考が存在するといってもあながち無理なことではない。しかしこれを更に進めて、デカルトのように、思考するものが存在するとし、このものが私の精神なのだと言うには無理がある。思考 (thoughts) には思考者が必要だという仮定は、文法 (むしろ

統語法)上の誤解である。諸々の思い(thoughts)は感じ取られるが、思考者は感じ取ることはできない。思考者というものは、不要な形而上学的がらくたである。

私の腕の運動についてはどうだろうか。それを深く考えないうちは、「運動」が存在するのは当然のことだと想像するだろう。現に私の腕が動いているのを眼にできるから。しかしこれは、誤解である。運動は物理的現象の一つであって、その本質を見抜くには物理学に行き着かねばならない。物理学はそこで驚くほど複雑な話を聞かせてくれるだろう。物理学によれば、変化が現に存在するにも関わらず、運動のようなものは存在しないと言われる。なぜなら運動には、論理的に言って伝わる「もの」が当然のこととして前提にされるからである。しかも量子物理学では「もの」というのが雲散霧消してしまう。ものの代わりに、ある一定の仕方で相互に関係する一連の出来事が取って代わる。本来はこのような一連の出来事が誤って「もの」と解されているのである。腕を物理学的に捉えれば、単にある種の抽象的な数学的法則だけが分かるにすぎない。腕を構成している出来事についてはほとんど分かっていない状態では、それが思考に似たものなのか似たものでないのかということについて何かを語ることは不可能である。結局、言えることは、精神と身体という二つの「もの」は存在しないということだけである。言い換えれば、一連の出来事が存在するということが、つまり後のものが先のものを思い出すことができるというような思考と呼ばれる出来事と、物理学が誤っていなければ、一般に私の腕だと見なせるような一連の出来事とがあるということである。しかし一連の物理的出来事が思考に似たものか似たものでないのかという点については、知ることができない。ただそれだけである。

今述べたことに確信があるわけではない。可能性が高いと思えることを述べただけである。いずれにしても、「精神」と「物質」という問題を伝統的な用語で語ろうとするのは明らかに不毛な論議である。まったく異なった問題として扱うのがよいであろう。「靈魂」という言葉で何が意味されているのかがまったく不明なままに、靈魂は不滅であると論じるのは明らかに非生産的である。こうしてどちらかというとも無味乾燥な問題が、最終的には非常に感情的な興味を喚起する問題に不可欠な予備作業であることが分かるのである。

しかしおそらくあなたは言うだろう。私は哲学者になりたいと思った。哲学者なら人生の目的が分かっているだろうし、私にどう生きるべきかを教えてくれると考えたから。しかしこれまでのところあなたはこのような私の関心に答えてくれていない。哲学がこのような問題については何も言えないのでしょうかと。

これは答えるに値する問題だが、その回答はそれほど容易ではない。哲学は、歴史的に見れば、科学と宗教との中間に位置している。ギリシャ人にとって、哲学は生き方の問題であったが、それは知識の探求に大きく関わる問題であった。哲学者たちの中には、哲学の宗教的側面を強調した者もいたし、またその科学的側面を強調した者もいた。しかし両者はこれまで常に程度の差こそあれ存在してきた。完全な哲学者は目的の観念を持っており、その目的に人生は捧げられるべきだと考えているだろうし、そういう意味では宗教的である。しかし同時に哲学者は、本質的に人生の最善部分が知識の探求であるとも考えている。なぜなら知識こそが哲学者が大切に思う物事の大半を達成する上に必要不可欠だと見なしているからである。哲学者の倫理的生活と知的な生活とは、このように密接に関係にある。

哲学者は、普遍的な用語で考えなければならない。哲学者が関心を持つ問題は普遍的な問題だか

らである。また哲学者は不偏的に考えなければならない。それが真理に達する唯一の方法だと分かっているからである。思考の普遍性と不偏性とは同じ目的を持ったものである。哲学者の究極の目標は、もし本当の哲学者なら、人類全体に対する広範な関心になければならない。哲学者は決して、空間に左右されたり時間に左右されたりするような視野の狭い者であってはならない。他の地域の人々や他の年齢層の人々のことが、彼の念頭に常に存在しなければならない。正義は、現実の事柄においては、理性的な問題と普遍的に密接に結びつけている。人類について考える思考習慣が獲得されれば、特定の信条にだけ寛容な態度を採ることがますます難しくなることに気づくにちがいない。ストア派は、この原理をあらゆる特定の愛情を非難する方向にまで進めたが、これは誤りであった。特定の人を愛さないなら、あなたの人類に対する愛も冷たく抽象的になるだろう。人類に対する愛が暖かく生きたものとなるのは、個人におよぶ愛情を通してである。例えば残酷な記事を読んで、それが自分の家族や子供たちに及ぶのではないかと想像すると恐怖心もわく。全人類を等しく愛する人間にはそのような恐怖心は生じないだろう。哲学者も、普通の人々のように友人や国家に対して感じる感情は持つ必要はあるが、この感情を想像し、一般化することを学ばねばならない。そうして他の人々の友人や国家に対しても自分が認めるのと同じ価値を認める必要がある。

途方もない距離や時間を冥想すること—これは哲学者の習慣とすべきことだが—は感情にある種の浄化作用をもたらすことができる。我々がつい感情を荒立てるような問題の中には、宇宙との関連で考えれば実を取るに足りないささやかなもののように思えるものがあるし、また一方では、我々が考えるほど重要そうには見えない事柄でも、決して無価値なものでないものもある。人間の振舞いには、プトレマイオスの時代の天文学が割り当て得たほどの宇宙的価値は認められないが、しかし同時に我々に分かっているのはただ人間の振舞いの善悪だけである。王の中の王オジマンディアスのように、個人的に偉大さを求めることは、実に愚かなことである。人間に獲得できる最大の力や名声などきわめてささやかなものであって、わずかの努力にも値しないものである。とは言え、個人の目標—世界を可能な限り理解し、美を創造し、幸福を増す努力をすること—は一笑に付せる問題ではない。我々ができるのはただそれだけだからである。まさに我々の人間の取るに足りない知識からこそ一定の平和が掴み取れるのである。この平和は、虚しい栄光のともなわない善なる宝、絶望のともなわない悪しき宝を手にするほど困難なことではないかも知れない。

[1996年12月10日受理]